年度　長期・中期研修報告書

所属　文学部　職名　教授

氏名　庄司 宏子

＜研修報告＞

2019年4月1日より一年間、カリフォルニア州アラメダ郡バークレーにあるUniversity of California Berkeleyにて長期研修を行った。UC Berkeleyでの受け入れ教授はEast Asian Languages and CulturesのCenter for Japanese Studiesに所属するDaniel C. O'Neill教授であり、私のVisiting Scholarとしての所属先もCJSであった。UC Berkeleyの研究環境は、アカデミック・コミュニティ、図書館（Doe Library, Bancroft Library, Moffitt Library, East Asian Libraryなど）、そして広大で緑豊かなキャンパスと、さまざまな面で大変素晴らしいものであった。特にデータベースの充実ぶりは素晴らしく、UC Berkeleyが擁する豊富でoff campus accessが可能なデータベースは、データベースが可能にしてくれる研究の拡がりの世界へと扉が開かれる思いがした。もちろんデータベースのみで研究ができるわけではないが、データベースが与えてくれる膨大な情報は、研究の視野を拡げてくれるものであり、UC Berkeleyを去った今、あの充実したデータベースが一番懐かしく思い出される。

UC Berkeleyでは自分の研究テーマに沿って研究活動に専念するほか、授業に参加したり、各学部が主催する研究会や講演会に出席した。アメリカ合衆国内のみならず世界各国から研究者が集って開催される研究・講演会は、とてもレベルが高くHumanitiesやSocial Scienceの学術研究活動の拠点としてのUC Berkeleyの位置を示している。また講演会の多くはopen to the publicであり、学生や研究者の他、地域の人々も多く参加する。こうした研究会、講演会に出席して、自分の分野以外の研究に触れることは視野を広げるよい機会となった。UC Berkeleyでは、研究について（1）誰もしない自分独自の面白い研究テーマを設定すること、（2）専門分野以外の人が聞いて面白いと思われる研究をすること、（3）常にマイノリティや少数派（unrepresented, underrepresented）の視点をもつこと、という学問の姿勢を教わったように思う。

研究活動、授業、講演会への参加に加えて、UC Berkeleyでの所属先のCJSが主催するさまざまなプログラムにも参加した。そのなかでも最も忘れがたい経験がサン・クエンティン州刑務所（San Quentin State Prison）訪問であった。訪問に先立って、UC Berkeleyの刑法の教授から、アメリカ合衆国全体およびカリフォルニアにおける刑務所の歴史、犯罪や収監の傾向と最近の問題、サン・クエンティンの更生プログラムなどについて講義を受けた。刑務所への訪問は、CJSの30人ほどのグループで、ドレスコードもあり緊張を持って望んだが、6人の受刑者（アジア系2人、アフリカ系2人、白人2人で、皆30代くらいの男性たちであった）から話を聞き、所内を案内されるなど大変貴重な経験となった。特にアジア系の二人はともにベトナムからの

移民の子供で、育った環境や犯罪の遠因にベトナム戦争があることを深く考えさせられた。受刑者の人々と一緒に歩き話しながらの訪問であったが、皆ごく普通の人々であり、このように外からの訪問者と接することがためになっていると語っていた。別れ際に、受刑者の一人が、10代で世界がよくわからないまま犯罪を犯し収監されることになった自分たちが存在し、ここにいることを忘れないでほしいとと言った言葉は忘れることができない。UC Berkeleyの先生でボランティアでサン・クエンティン州刑務所で講義をしている人もいると聞き、大学と社会の関わりの広さも体験することとなった。

6月にはUC Berkeleyの International Houseにおいて、世界各国からこの大学に集うvisiting scholarsが主体となる人文学研究のシンポジウムが開催された。このシンポジウムに研究発表のプロポーザルを送り採択され、研究発表を行った。また同じく6月にUC Berkeleyやサンフランシスコ近辺に滞在する日本人研究者が毎月1回定例的に行っている研究会でも研究発表をする機会があった。文化系理科系さまざまに研究分野の異なる研究者を前に発表する機会は日本ではまずないため、貴重な経験となった。

9月には私が主たる研究対象とする作家Colson Whiteheadの、2019年7月出版の新作*The Nickel Boys*の出版に合わせた講演会がバークレー近郊のDominican Universityで開催され参加した。SNS時代にあって作家の活動は小説を出版する以外に、テレビ、ラジオ、Podcastへの出演、Twitterでの発言など様々なプラットフォームでなされるが、この講演会では、作家に直接接して講演を聴くことができ、小説ではわからない一面を垣間見ることができた。2017年にピュリツァー賞（Pulitzer Prize for Fiction）を受賞した*The Underground Railroad*以後の新作とあって、聴衆の熱気も相当なもので、Colson Whiteheadの小説を読む読者層に触れることができたことは、大変有意意義であった（2020年5月、*The Nickel Boys*のピュリツァー賞受賞が発表された。Whiteheadは前作に続き連続受賞の快挙を打ち立てた）。

バークレーは大学も街も素晴らしく、長期研修をここで過ごすことができ、大変充実した日々であった。カリフォルニアで体験したことは研究活動のみではなかった。10月後半から11月にかけては、PG&Eの停電や、カリフォルニア北部で発生した山火事があり、これはカリフォルニアがglobal climate changeの前線であることを身をもって体験することになった。そして3月に入ると、新型コロナウイルスの影響は当地にも及んだ。3月の二週目から大学での講演会や研究会が続々と中止ないし延期となり、授業はオンラインに移行した。CJSのオフィスも閉鎖され、その後16日からバークレー含めサンフランシスコ近郊の6つの郡でshelter-in-place orderが出され、essential outing以外は自宅待機を余儀なくされた。数日後の20日にはカリフォルニア州全体でshelter-in-place orderが発令された。郡や州より大学の判断が早かったことは、UC Berkeleyのアカデミックな機関としての特性を語っているであろう。外出ができない日々は、off campusでのデータベースにアクセスできることが研究活動を支えてくれた。

4月に日本に帰国してからはZoomによるリモート授業の日々であるが、一年ぶりの授業に新鮮な気持ちで臨んでいる。Zoom授業には制約もあるが、リモート授業に必要なテクノロジーを発展させるという側面もあり、これはコロナ後の大学授業の方法に変革をもたらすだろう。UC Berkeleyで過ごした貴重な日々を心に抱きながら、そこで学んだ研究手法や姿勢を今後の授業や研究に役立てていきたいと思っている。